

第16回 龍頭が滝案内

暦（こよみ）と、松笠の暮らし（その2「旧暦」と「閏月」。）

「旧暦」について、「閏（うるう）月」のことを加えて、もう少し紹介します。

「旧暦」では、ひと月の長さを、月の満ち欠けで決めていました。月の満ち欠けの周期は約29.5日ですので、そこで、大の月（30日）と小の月（29日）を作り、これを組み合わせて1年としていました。しかし、例えば大の月を6ヵ月、小の月を6ヵ月にすると、1年は354日となり（ $6 \times 30 + 6 \times 29 = 354$ 日）、月日は季節に対して1年に11日、前にずれてしまいます（ $365 - 354 = 11$ 日）。

そこで「旧暦」では、閏（うるう）月をおよそ19年に7回の割合で挿入して、月日と季節のずれがあまり大きくなるように調整されました。

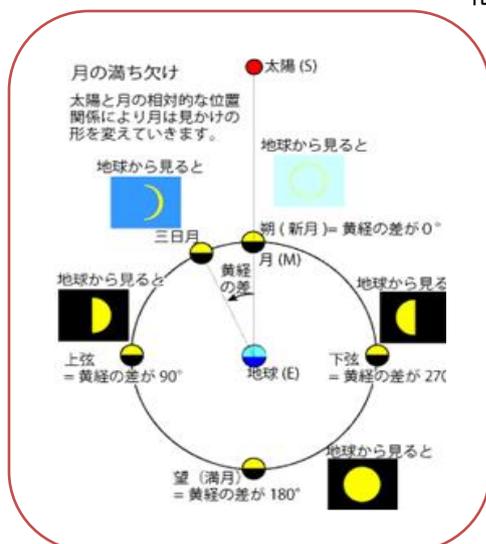
計算ばかりで恐縮ですが、地球から見ると、太陽は1年をかけてもとの位置に戻ります。これに要する時間（1太陽年）は、365.2422日（365日5時間48分46秒）。月の満ち欠けの周期（1朔望月の長さ、平均）は、29.530589日（29日12時間44分2.9秒）ですから、計算すると、表のとおり、19年後に季節が一致します。

19太陽年	$365.2422\text{日/年} \times 19\text{年}$	=	6,939.6018日
閏月挿入調整	$12\text{ヶ月/年} \times 19\text{年} + 7\text{閏月}$	=	235か月
調整後の日数	$235\text{か月} \times 29.530589\text{日/月}$	=	6,939.6884日

では、閏月をいつ入れるかですが、「必ず6月と12月に入れる」というように固定されているのではなく、月日と季節のずれが大きくなったら入れるような規則に従っていました。

閏月が入った年は、1年が13ヶ月になりますから、月日と季節が1ヶ月もずれてしまっていたわけです。

しかし、1年間の季節変化は、太陽の位置によって、地表面が暖められる強さが変化することで生じているので、農業など季節と密接



に結びついた作業をする場合には、どうしても正確な季節を知る必要がありました。そのため、季節を知る手だてとして、太陽の動きをもとに決められている、「二十四節気」が使われました。「二十四節気」とは、立春 雨水 蟄虫 春分 清明 穀雨 立夏 小満 芒種 夏至 小暑 大暑 立秋 処暑 白露 秋分 寒露 霜降 立冬 小雪 大雪 冬至 小寒 大寒、のことです。

（次号に続く）

←月の満ち欠けが起きる仕組み。

（国立天文台ホームページより引用。）